



ヤマイラクサみたいな草の繊維、あるいはシナノキの繊維をずっと織って、生活の中で実際は普通の蓆民は使っておりましたし、それから自分たちの建てる家、あるいは屋根をふく萱とか、全部森から持ってきた。つまり、畑と田んぼでできるわずかなもの以外、ほとんど全ての生活は森に負ってきた国民なんです。

ですから基本的に森の近くで最初の集落が生まれて、それがだんだんだんだん川を下ってきて、そして今は大都市になっております。子どもはもう森に生活を負わなくてもよくなった。子どものへその緒は、実は海外から入ってくる 40%以上の食糧、あるいは海外から入ってくる 80%近いエネルギーによって、子どもの今ここにいる環境が維持されているわけでございます。

今日は、ひとつはコミュニケーションということと、両方の活動のみなさんともサステナビリティということをテーマにあげていらっしゃるから、その意味で、サステナビリティということを言いますと、日本というのは旧石器、縄文、弥生とずうっと続いて基本には森と人間が共存をしながらサステナビリティを維持してきた国ということが言えると思うんです。その森と人間が共存してサステナビリティを維持してきた国が、今は大都市周辺でその縁は切れてしまっています。

実は、森の名手・名人というのは急に森の中に名手・名人が生まれたわけではなくて、森の自然を利用しながらどうやって生活をできるか、山菜をどうやってたくさん採れるか、あるいは木地師でどうやって木のお椀を作っているか、あるいはマタギでどうやって狩猟と農耕をしながら生活を維持できるか、そういうような名手・名人なわけです。つまり森と話をしながら、コミュニケーションを自然ととりながら生活をやってきた。ある意味では日本が3万年、あるいはそれ以前から連なってきた持続可能な自然との共存の形態の最後の具現者です。

最後の具現者というのはなぜかと申しますと、先ほどから言っております子どもの生活は、もう日本の森に依存しているのではなくて、海外の資源に依存するようになってしまったからです。この最後の具現者、これはもうほとんどが70、80のお年寄りです。それを何とか次の世代につなげたいということで、高校生たちにこれをつないでもらおうというのが実はこのプロジェクトの趣旨でございました。ですから、ほんとにここで切れてしまう、日本人が持っている日本バリューというものを次の世代にどうつなげるかということで進めてきたんでございますが、実はそのあと全く違う展開になってまいりました。

高校生たちは毎年100人ずつ、おじいちゃん、おばあちゃんのところへ話を聞きに行きます。100人がレポートをまとめていきます。これは大変な作業です。聞き書きですから、要するにテープを録って、テープを書き起こして、そしてテープを書き起こしたものを10分の1ぐらいにそぎ落として、先ほど言った「おじいちゃんがこう語った、おじいちゃんがこういう人生を歩んできた、こういうような技を持ってきた」ということを作っていく作業なわけです。

これは、高校生たちはみんな2年とか3年とか(1年の子もいますが)受験勉強とか学校の勉強、学校のカリキュラムとは全然違う授業を、どんなに文部科学省、林野庁が関わっているとしても、学生たちにとっては全然違う授業です。

100人が本当にこれをやれるのかな。テープ起こしをしたものを、それをまた名人たちと話をして方言がわからないとか何を言っているかわからないというところを聞きなおして、またそれ

を切り貼りしてまたひとつの文章にして、またそれを投げかけてということをやらなきゃいけない。本当に 100 本が 100 本出てくるのかなと思いました。

1 年目、100 本がきれいに出来てまいりました。2 年目、また 100 本が出てきたんです。私もそこでなんでかと思ったんです。カリキュラムにないものがなんで全員が 100 本出てくるのかと。そこで私どもが初めて気がついたことがあるんです。

コミュニケーションというのは、今日もそうですが、私がこうやって言葉を投げかけること、要するに私が何を考えていてこうだということ、ネットにしても会話にしても、しゃべることがコミュニケーションだと私どもはずっと思ってきた。多分高校生たちもそう思ってきたと思うんです。ところが、自分の言葉が通じない人たちにアポイントをとって、言葉がよくわからない、どうやって生活してきたかわからない人たちの生活の聞き書きを起こしていくときには、書いた文字をどうやって切りつないでも意味がわからないんです。つまり文字と文字のやり取りをしている間は、彼らはまったくその名人とコミュニケーションがとれないわけです。

ところが、おじいちゃんと話に来て、ある 1 枚の木の葉があって、それがきれいだとおじいちゃんが言った。自分もきれいだと思った。あるいは夕日を見ておじいちゃんがきれいだと言った。山がきれいだと言った。自分も本当にきれいだと思った。あるいは、おじいちゃんがあるところで笑った。自分が笑った。そして一緒にそこで初めて言葉が通じた。つまり、ずっと言葉のやり取りをしているんですが、その行間を埋めていくお互いの信頼関係みたいなもの、そういうものができて初めてコミュニケーションができる。つまり、今までディベートやなんかで発言することがコミュニケーションだと思っていた人間が、「聞く」ということがコミュニケーションの一つの重要なファクターだと気づいていきます。そこで、「聞く」ということがそう解った瞬間に、それはおじいちゃんとの信頼関係になるんですね。

ですから彼らは与えられた 100 本の、要するに 100 人の子が聞き書きの 1 本ずつをまとめていくということが、これは自分の作業ではなくて、実は聞いている相手、コミュニケーションをとっている相手の人との共同作業、つまり自分たちの名人が 100 人のうち一番すばらしい名人だと、みんな思うようになるんです。このおじいちゃんを裏切れないと思う心が、今度は初めてその聞き書きの製品として 100 本が全員出てくる。このとき、その子どもたちが変わっていくんです。

今の高校生は社会との接点なんて、ほとんどないんです。要するにバイト先のコンビニの店長と学校の先生だけですよね、大人の世界って。その高校生たちが、普通の世代を飛び越えておじいちゃんと心の信頼関係ができたと思った瞬間、彼らは社会の中での自分の位置づけとか自分のアイデンティティをはっきりと感ずることが出来ます。

今日は何人かそのOBたちが来ておりますので、あとで話を聞いていただければと思うんですが、そういうことによって、本当に子どもたちが、生きるということ、学校で教わったこと以外のことで自分が認められるということ、学校が与えているという価値以外の価値が世の中には存在するんだと、それを持つことで本当に安心ができるんだ。

おじいちゃんたちはなにも学歴があるわけでもないです。大変な大学を出ているわけでもない。だけど自然の中で自然とコミュニケーションがとれる人たちですから、全然自分の人生を不安に

思っていないんです。高齢化だとかあるいは少子化だって言っているのは、都会の人たちが心配しているだけで、彼らは自分で家も建てること、自分で自分の食べものは全部作ることができる、おばあちゃんたちは自分の着るものは自分で織ることができる。何の心配もしていない。そういう人生があるということ、そしてそのおじいちゃんたちを通して向こう側の自然があるということで、ものすごく子どもたちも安心をします。そして自分たちが変わっていきます。自分たちのアイデンティティがそこで出てくる。そこで初めてコミュニケーションがとれているという状態なんです。それを見ると、周りの大人が本当に変わるんです。

私どもも今まで最初は、本当におじいちゃんたちのアーカイブとして、持続可能な社会のモデルとして、知恵として残していかなきゃいけないと思ってこの事業を進めていたのが、むしろ高校生たちが世代をつないだコミュニケーションがとれるということ、何とか応援をしていきたいと思って、林野庁の職員も文部科学省の職員もNPOの人間も財団の人間も、みんなが本気になって本当に手弁当になって、スポンサーを探して子どもたちが何とかできるように枠組みを作って、そして今は卒業したOB・OGたちが事業全体の主たる運営をするように、要するに高校生たちの次の世代のケアですとか、あるいは教育をするような形の人間関係が生まれてきています。

ほんとにひとつの「森の“聞き書き甲子園”」というプラットフォームの中で、私どもが言葉の投げ取り以外のその向こう側にある、俗な言葉なのかもしれませんが、やはり「愛」だとか「信頼」という基本的にコミュニケーションの一番のベースの部分、その部分に触れられるということが世代間を通していちばん感動を与えるんだということを本当に痛感をさせられております。そのへんのことも、またあとでトークのときにお話ができればと思っておりますので、次の方に引き継ぎたいと思います。

どうもありがとうございました。